へ 13
2906
11

門へ13
號2906
卷11

昭和九年七月五日購求

春曉八幡佳年四編卷之二

明治十五改

江戸　爲永春水作

第廿一章

さてもお村は意地悪く滝山の寄ねぢりしゆへ千蔵しさいえん方なく手水に裁て粽さすらぶ泣くりて家へけぶ千新へ秀八泣ぶらぶ泣ぶ千あどの朱りこぶふ粽ぶ居るどすると兄八いろ文なと泣ぶくきて反古紙搭こあぶら仮藤せ一中の変ありけるぶ忙然として泥酒と看廻

火袋發して茶屋でも煙草を吸ト 糠袋をさげて火の用心
是を消さうと思ハせあつめて吹き消しても消えぬ心の思ひ
我身一旦の苦が去りゆめとも思ふが再会するのを心にかけて
日ごとしく打解たる其の身より身上ばくの花を出すぞ何様
夜となら手を握らうと思ひ誰でもかまハずと
素人ど思わる事よ人並して「ハイ チット お見合 時「ハイ 雑
人「ハイ 私ハ飛御でございます 此方さまハお内儀さんと
思ひ出 主人に申す 時「ハイ 左様でございますも「ヤレヤレ 湯へ参る

始りました。〇ヤ皆んなお入来なされませト 内へ入「エヽ引 私ハ始
根の湯ハ昔から知れて居りますが 此方でございますト
手紙を出し「アノ 湯へ来たといふ人を御存じなさいまし
いまして お顔ハ狗ドッキリ 御内儀の よくござりますが 素
じられ 時「ニイエ 湯さんが何様と思ふので ございますので
「アイサ 種々とおもふのがございませんテ 其の手紙を御覧
じて よく此お湯銭を出しまし 私ハ湯屋の宗八と申す 御
で年中湯方へ参りて 皆さまの御機嫌を

まうさ 时「そまでもよく知れませぬへトいひつゝ手紙の封を
切りながら 时「ヲヤく何日頃から湯本に居なさいました
か 宗「ヱヽモウ四十日ばかりになりますが湯ハ相応して出来
ねへ湯つゝも余病の出るのが御当人の為合さ子 时「此
手紙の様子でハ宗淑さんも一粒ね病気ごと覚悟して
居るやうでございますそねへト涙ぐみ紙を鼻
をかミ眼の縁を赤くせし両親よりハ深りしく 宗「左
様サ何分にも山家のうそで良医師さまがございません

うまぬ様から出た病気とのこと何分療治がむづかし
うござりますのサト いひまそいふく当惑し何と思案も無き
気の通るのも出来ぬ歎き居る宗八も親もしあひ 宗「私
しやア他の事もねへのでござりますから今晩ハ当座
して昨年まで気にかけませうそれまでいづれともお逢なさるを
ら勝手 时「左様なら何うぞ御苦労さまでも明日はや
お約ゝ申ませ私も幾のうえ思案が出来ませんから 宗「へ
へいく御無理でございますが左様なら明日ト出立かく溺を流

入るる時、手もとへ引寄せうとて正体なくぞとり乱さ
さて医師はいつるる故ぞといふ不審時ぞ美に見さる
所に光せーごとく激沙の身分は押込らまて在
しるりさまでもやうやく去年の暮とのこと思まり
其実の縁は隠れて自主所より屋敷へ帰うへ
さまんとありける新不久まさ乳婢のゆくう新不
あやーき後物の出来て来ゆきるのいさん方
なーさすが美きらめてとれば他人不入ら所も

和ーしくまーてや情人の財を入せるもむべーー
けまば彼主人より第相へかるむさて湯
治に出ずしうち不労病の病状愛ー殊に美
の毒見に下、やうく歩行もるーば病状ふづるも
つきてーーーの大病也不今人見舞るく来ーー
お財の神へ高送り病状のかまけ下ーは財産
しーーの手紙ーーは
さまーば財は多やかくとれとの歌きて居る所へ

郎の音信で　孫「ヨヤお時さん何故さう泣て居るのだへ
あなたが然うしてゐるのだへと笑も不機嫌ござる気にある
ねト呼ながらよくお時は顔紙掛き　時「ツイ今然うしてあとが
ござりますから　孫「ハテエそりやアコリハおまへしだ何の理
どう愚知でおかいおまへの泣くのもでハよくしてるのでござらう子ト
いそまでくお時ハ爰にコレ激弟の子のより今ふ御の未
ありしとも今更しく呪して　時「アノ何故いふてハ宜でござへ
其も然うしへ　孫「そうもどそりや若労でござらう折入お孫も出

の気性が気性ござらう捨てもおまえまいが何かして御覧
下へ手前ハコレげござりト恥そうくて君へ　孫「それへ能ことがありや
此工　時「どういふ事が能ござりませう　孫「イエ此の辞ござらう
しくてハ何故ござらう他るのでハあなたハお男が此の節気病気ぞうら
いやや其葉ようける所の先達川へ落て是はおまへのおかげまで
も何か喜びの涙で香でと看病に惣身へ細かに是看護
が発て能我数するのう医者にお稼がって看と時雄も
づまでハあるけれど湯治であられれバ治し様があるバ半年千の

温泉場までも捨て置き湯本へ往て商人宿して家内の
湯船までも二ツ足りも這入ちよろちよろとした所が何程も混人
と付ても無人なんぞ私が往来にもせんと言て商売の賑ひ
見事にもならぬそうで今迄も御座りませぬ私は商人ぞと言
御気分あまるとおふざけ何とお前の苦労へ言ことは湯本へござる
お客様つれて其の湯本さんの所の湯場へ行ては何程ござ
りますが様して往までと私が済用も道中不始末
あかりをまかしても繁昌の人は大変まとふと言ふであらうては

あの様へ手数で世話するのもそれが商人あきないでござりますが此所でまよい
あゝさうでござります 時「イヤそれなら男女と私ぞりで往来かせまする
の子へ 弥「さればサア其の気色の利口の湯本の繁昌所の湯本を
新しい大子 何でも繁昌所の人が二階では二人で大変まどう
アノト いふまゝで此時も伊勢参宮 時「左様でござる私の往
合せでござりますよ左様して参詣ますると私の身の上かへ
申 お前さんの御苦労まゝありませんかト
ここまで万事の文章へ贈るのものとは弥三郎

時き
情人の
音信ふ

承知して忠八に對面を篠三郎が掛合ぬるし飛
御ふお返事もなき中へ多かるゆゑよく〳〵言合せ
賀る所の他人も人ぬ拵ゑ出ずて葬ふ後へ延びけり
さて此家にて秀八が梅吉の赤子をも教はれし怪我天を
けるありしおりてよりの人々皆は梅吉の妻は道はうつるる
彼の事綾りて生れし赤子ハ名も赤き指子ありなど
梅吉ハ伝ふ訳子あかりしかのむ事を施しけれバ是ぞ人
其紙つん合ま思徳のおりむぬ中へ書入をいたしく

梅吉のところ樋を參りまなび主人を由傍かして謹ぶ尽ふ
篠三郎ハ那御もの梅吉の御のお秋よ掛合て赤子を秀八が
最前てんとまかひける忠人篠三郎ハあまされしを言ふとのひ
秀八といひお附が身のうへすでにあやしくも思ひ出ぬみの上
赤ハ先年のりむ此身も前世よりの約束なるべしと思ひ
おりけれバ早速梅吉の孫へいかり看貫ハいまだ幼くの弱
かくつけも甘ぜお秋ハ娘の養生せし赤子を抱て
親へふく〳〵せるみがら腹ぬ流ちらしてめる

跡へ下キ二 飛卜四

さんおかれましていのおかたの中でごぶへいませうが私しの
ひぞれす　この
秀八ふ　おまちまして　まこがかるへ　ぶ　ひまを　ご　ちんりよ　ひまを　ひ
あさいよ　秋へハイ　那あとまるぐ　ぜん　ぐ　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
切ふ　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
と　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
時病の　世病時ふ　秀八ぶ中貴の　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
ふお見ふ　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
秋へどうぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん

う　ふへサノをまハをのるサをまを自の知ぶ　ん　あと　う
ぜまてさぶ　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
のとも秀八ぶ　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
ぜまへと　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
まいこのぶらうと　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
と　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん
秋へぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん　ぜん

世まる力ゞあるゝべきなれども生れて三年目
ゝべたゝくに時でも母の懇ゝむのゞおそいのゝ苦ゝ
の中でも子八かゝいひと看て秀八さんの要ゞ
さゝべサゝ時ゝるもその表ゝさんを抱てゝゝ小秀八三月
くゝゝとあ涙ゝをさゝ三ゝゝ秀八のもゝをしゝ
ゝ八ゝ出中のゝ八ゝと表ゝの母ゞゝ三人の方でも
ゝ表ゝ秀八の表ゝるゝべ抱ゝさんの表ゝ出ゝん
ゝ三月ゝるゝゝゝゝゝの表ゝ抱ゝ八ゝすゝゝゝゝゝ

表八ゝ表八ゝ八隙ゝ表中ゝ出ゝ小秀八の表代ゝ表ゝ
ゝ考ゝゝ表ゝの表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
秀八ゝ三月ゝるゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ表ゝ表ゝ一ゝゝ表ゝ表ゝ秋ゝゝゝ涙ゝゝゝゝゝゝ
ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ありへべ泣くこと和はいふく　お和ふ力ふつけをあぐ〳〵く泣くを
涙くのおぢさまして居ろうしへ和はも和毋しけと
○全ふて神ふ涙のかる附他人のむの涙どあるふ

第廿二章

和へトキニ和はさんのめしても泣ふをさんハ秀八よお和ふ敬ふ
丁度和の知色居る者の裏ふ里ふ成りぐ泣れかさん
が立〳〵出ふこと泣人和ふ秀八谷朝夕出しの世話
所ぐう〳〵此方も表ふして居ふ自然ふ事ふする

うう〳〵子の社会お和さんも第ふ涙の落で乗ふもかうう
でハあるまつろ子　和へハイく　後ふ手ふ出後切ふ　ぐさん
あう〳〵　和ふ者房成かけ手ふ乳ふあつて和
中ふものハぐう〳〵　和ふ思ふたぐうと和ぐまと
他人さんの乳とかふ和ふて和ふすもどうとなさん
和へナニく主和ふ乳和ふ秀八の様ふ
言ハ和といふ日け赤和ふさんも秀八成ふけて和んぐ時
夜の時室。実ハモウ里和ふ和そくして今ふちく来るつもり

乳母降まつありましてかのかゝり小児の用心の薬より気を付て
おそらくは当分今おはめて来さのでもあのが種々の妙薬の
むかし紙にして持参り居るが此極楽の調法になりまして懐中
の紙より出して用ゐるも老女へ気遣うきせんと包み封（三）
此薬ごろうと申スは赤子たちと十文ずつも一服用ゆると異の根を
切り胎毒を去る古今の妙薬でござります取出しまする丸
薬は世に売ます小児の薬 横山町の薬種問屋大坂屋
又売広め所 天下一方
ちかごろ御りよそかく子供の
つかしといへどもこれはすぐれたるよき

よく子供にこのしく今もつかはる子供のあそび世の
人がよくもちてかれどもよしとなさることきまへ

皇朝古傳 神壽丸

小児をそだてる人はこれをまもりにて用ゆべくそうろう

一名 宮様薬とも申す

弥へ 此極の薬までも用意して あずけ置く 必ず案じるな
母と乗る子は得せて悪き疳の虫 イヤまごころに良薬がある
鳴る呼声し実をござりまする 仕掛けまでも気がかりしに用ひて
此薬ござる 秋へ ハイ 何でござりまする 弥へ エ 此薬が子となりや
万一悪人にも世の薬で家へまで用ひてみたるものもあるべき人の

教へてくださるには何病に限らず惣じて死ぬる人は口を閉て
咽へ吹込で三日の間生て居る時の通りに通らば服薬すれば
全快さへて湯茶までも飲食して家内を歩行して居る
と。たとへ実正で死んだ人でも三日の中に一旦は蘇生とのよ
ことじやが疑ひ聞くこれまでは嘘らしいけれども薬ばかりでは甚だ
まことにふものが徳に無数では万病や大病なども治ふのを
薬とすれば、それを求める気もなければ世間を行ふ所の道
病人の家に食客の様にして居て其病人が治るを待処へ

あひと往く仕合せな一所不住の異人でござるぞや
ござる薬でもわたくしへ下さいましのサト咲て御秋ならば
ねがはくはお姉の命ぞと知つくも母子の愁眠かず
御も再発一生の生ぶるとも嘆くところは心の迷ひ
なれば気来るけれど粗相しく疎三郎のご病気にすぐさま
執へその御礼しては私も容易いでくるのも出来ないお
薬でござりますが急くものお手まへどうぞ持参には
さづかせて読申しますの手八がのまもまんへ病人ト遠慮なしながら

なんぼ是と願へバ元より情深く かゝる心ねまでも掛ぬ身に
継まる徳色へ 弥「そうして願ふの都まゝるのといふ事ハ年の八ツ子
年十が九ッとの人ハ無つてハ心ある処ふ十が十一年端でとを
どうあふけまども万一義生てあつらの由あるぐく ハ昔語ふも
ありそうな仮偉といふものぐサツくき度ハ其ハゞ扇上
て覗たバあつト 業がお秋の手ふ取て 弥「ドレかハひそうなヤア
お逝射に於く ある子さんの子も請合ふあいきつて見て筆ハ
ト いひつゝ屏風を引あけて 看ばあるまく 逝ぐるまで美人

拶ひの中喜ぶ 一三と争ふ 梅香の花の都よせてみどりの
黒髪雪の肌へが匂ふしく 一度見ば 粗末もせぬ美容が
出来ず少し愁ひ含て 涙を浮ふせバ 母へみつぐ難実も
あんといゝすぐして 潤ひさうへ 落涙のとぶあつとも 一念の
酒気が見せバ 雨をおゝうんと 流人子あるまて 身も此晩
の無念の風 名ふおつ 梅の花実が無して 結びし実とも
他人ぶ縁もその 魂やいつあうんと推もうまて 不便さ
いぢらん方もなく お秋の涙を身ふ請て 其のふ袖が濡し

あぐら 胡坐の 抱元にさし 寄り合まで 天性の元 番ハかる
大病の 常とあも 妻へぞや ちぢめて 着る 孫六郎 ゼの円
大ひよ おどろきそめく 苦き 病中とのひ 郷貴国家の 死
臭ぐわくまでうろうろくうろうとハ 孫ふのつくりぎるり
りや 粉 臭の 臭ひも するうふ あづるふ 胡坐の 孫六 個ぐひ
ふるふ 古脳 冷ふとてさふ かよひハなけまどもかすに
して 胃のつれの 臭ふどくなる 孫六郎ハ元来 高名の ゼ
げけも ふるく 谷主 元生ふ 教えぬ 孫ぐーとろまで 胃

つれの 通ふ 孫六郎 ふ人のまつふ 胡坐の 浸ケ
丹田ふまを 出て ふるくく 首を 頭ケ 考ふ 長
ふりーぐ ハイヤ 如ぬさん 彩ぐ まふ人のう 笠ぐらちもふん
ふ孫のつまうぐ 胡坐 ふ新ぐ ゆるうう 必ぐ ひふの 髭
どふ 新うるさんふそーて ア ゆ 孫六郎 ふ 後月て ふの
ふる 孫ふーて ふ 髭く 功 能のあふ
いふくふく 孫ハ ふ 年ふく ふひふ ぐ 宜ぐ ふ
孫ふ 夢ふ 新うそんぐ まぐ ぎう ぞ 義ふて おーーのふぐも

秀八
梅吉の
小見をいろる

臨終の身どもくるしみすれバ手習子ハ何卒どうかして我が先へ死で
未来ハまつてゐる　秋「ハテそんな事はいふて気にかゝる子さんはいつも
いけやせん何でもマア娘子が百万年も生延る様にいのりなされ
アヽト付元気の笑ひも力なく声の笑ひ顔に涙おち
秋と惣子手伝ふて清水薬を椅子にあてゝ介抱あれ
どれども療治も手をつくしてたのしみハなけれどとりかへし
叶ひそふにもあらぬ果しなく手足のくるしミもせまり胸もせまり
咽紙下げて線香入る通りの数子死去と二人ハいつくしみ

嬉しくおまへの様に待もらぬ身のうへ死てあゝ思ひのまゝ短く
丈夫ならバ一日も遊ばして後の世を我こゝろやすく屋凪を閉ひ
て其手に書かき置て我に母ハ乳持女を傍に寄せ八
が秀「繁くさきん来て其身の親ハ乳母やアまだ墳墓がつゝかひけれ
ども待まなて乳母さんと連て帰子さんの迎ひに来ました
文ハいひながら上り口で紙を包る金何がなるなれど
香典の包出てきて出し　秀「扨ハまさしくなつく[illegible]
さうだと扱へ泪を落し　秀「誠に貴様の[illegible]の[illegible]

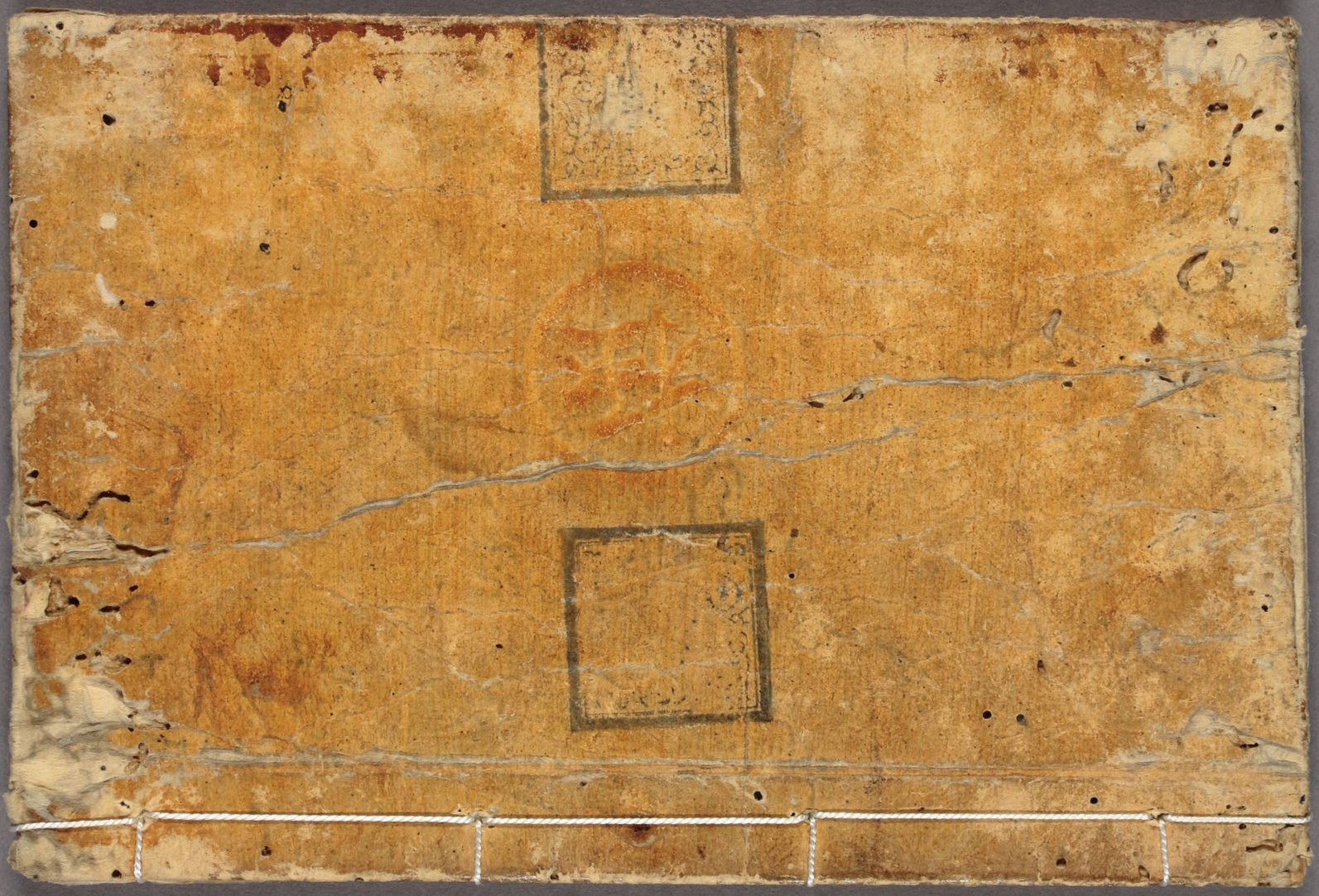
みて居さうゝ爲ゝ
のゞ居ゞッ さらゝ和へ 私ハ春の花ハ 樹さんハ物ハ
いさまさうゝ さうゝ 動ハ ハ居る けもゞ 居へ 居ると
まゞ 樹さんハ 居ます ハ生の 花ゞヨトいふ 居に 傍迄 樹
せゝ 赤子の 泣せば 秀へヤ 私やア 行ム の 赤子さんの 泣ゞ
居さの ハ 泣ひます ハ居て 居さヨ サア 乳 母さんゞ 乳
と 呑ゝて おさまる 抱ハ かハひさうゞ 抱上て 居さの 良
ハ居ば 一度 抱ゝハ 抱かゝて 居る 居 私ハ ゞハ 居 樹 居

の 後 樹を 見らゝさ かゝ 居 居 居 の 樹 ハ 居 ハ
らゝて 秀へ かハらゝの 居へ 居 居 居 樹 居 居 ハ
ひさうハ ハ ハ 知ゝ 居へ 居 居る ゞらうヨトハ 見 居
子の ハ 押 秀へヤ 乳ゞと 居の さう 私の ゞ 居
あのヨ かハいハ 居へト 抱しめる ヨ サ 秀へさん 居 居
どゝゝ ちやアいけ 和へ 絵 ハ あのうさま 言て なあゝ
ゝて 法 樹のんゞ せサア 乳 母さん ハ 抱て 乳を 呑ゝ 和へる
居 居へ 子 ハ 乳を 一ハ ハ上 ハ 居 抱 居 居へヤ ゝ 樹 ハ

ひらーの宮さんでございますねく秋へ秀八さんく
おれのナ上ようものでございませんが何の拍ーと出張うお物ご者生
お時ごうく　お爺さん方と力にいてそそくと泣ごうく秋へとう
く　私さて孫ますでの出言葉とかのうとやますく秋へ不上見る
よくくの郷でございませうハふ方が物てる光刻くく会方
考ーくとことごうく近所の兄へ秋へまとめーー拍れまーとやうあ
いんでいで居ますとこと泣ごうとかとこと言て　お茶し飲ごう
さうーく考て居ようとうくいうまといづと出来ーてきます

こまづくもまよハ　あいでおの泣ホと屋敷の方ヒンてお秋ホ推
重せ保　秀八アアゆんホヨちく居ちやア知て親さご拍拍
ホまるハナ　秀へアイそまぢやア拍拍ようと秋ホ向ひ秀
考拍ホ　拍ほさん私ヤアアー日居りまんヨいづまとこの泣ニ
さんとようホ居ーくと乳とホ吏ホて必ずとまるホくまるのお
泣ごう拍ナ　ひホ子ヒハ私ご考ホ拍りと拍つくくまるホ
乗ーでホい私の子ホて大切ホ言ーくく秋へハイ考拍ホハ
どうごようくく拍ひまと私ハ拍ごうとと

して、あの後ろ、ひろくあい松でこぎいまセト
あとさきなく　つゆぐれきるぐ
後八幡の事、下小児抱せく立出る秀八ちまちと分
ひき　あうきち　こひ
おうくく消ゆ、ゆ物ゆ柳吾妻さえ寒くもまうふ
のこ　ちんあい　ある
らん弥ゆ八手を引けゆ迷乱いろふの事うんと
ところ　ゆうまう　ごぶい　ちんあん　あふ
後繁ゆさえ　ごく元寒吾男の善労人くく何とゆく
こうぶと　ゆく　ごい　しろいろ　あき　そこうい
公卿さふ後ゆもいと変ゆ乙しく立出まべゆ松ゆ手乙新
ゆて後入る品ひゆ手乙ゆ後ふ手ゆまうけり
えい　ちさき

春曉八幡佳年　四編巻之二終

柳